

武村豊さんの証言

学徒の任務は食事の世話、排せつ物の処理、水汲み、洗い物などの雑用であったが、野戦病院にはなくてはならない存在であった。当時は、本部壕を「下の壕」、手術壕を「上の壕」と称していた。壕の入り口右手に手術室、左手の壕壁に添って粗末な2段式の病床があった。患者の収容能力は70人ほどだった。

4月中旬、私を含めて5人の学徒が配置された。任務は食事・排泄の世話に加えて、本部壕から食事を運ぶ「飯上げ」、手術時の照明係「ロウソク持ち」があり、切断された手足や、汚物の処理も学徒の任務であった。運び込まれる重症者の傷はウジがたかり、壊疽をおこしていたり、内臓が飛び出していたり、手足がもげそうだったり、目を覆いたくなるような惨状だった。

手足の切断や、弾丸や破片を摘出する凄惨な手術が、夕刻から明け方まで続いた。苦痛と恐怖に悲痛な叫び声をあげる患者に「貴様！それでも軍人か」と軍医の一喝。私も、ロウソク持ちが仕事で手術の時、最初は怖くて目をそむけていたり、眠さからふらふらしていると、手術中の軍医から足で蹴られたりした。最初は怖くて仕方なかったが、切断した手足の処理などはだんだん慣れていった。